

「南方憧憬」と「帝国」の接点

台湾原住民神話に関わる作品・中村地平「太陽の眼」を通して

阮文雅

はじめに

台湾「原住民」文学は近年、民族のアイデンティティーへの関心が高まるにつれて注目を浴びている。日本では、植民地文学への関心が高まると同時に、中村地平の「南方憧憬」も次第に注目されはじめ、佐藤春夫の「南方憧憬」の系譜を継いだものと見なされている^①。台湾原住民（先住民族）神話に基づいた作品についても、蜂矢宣朗氏は『南方憧憬—佐藤春夫と中村地平—』の中で二人の作品を合わせて論じ、地平の「『太陽征伐』という蕃人伝説集は『魔鳥』を意識して書いているように思えてくる」^②と指摘する。しかし、原住民から直接伝え聞いた口承神話に基づく『魔鳥』とは異なり、「太陽征伐」は臨時台湾旧慣調査会による『蕃族調査報告書』「伝説編」に所収の神話を元にしてしている^③。

昭和十六年、地平は『台湾小説集』という単行本を発行した。その後記に自ら「南方に郷愁し、南方に憧憬し、南方を愛してゆくことは、一生、僕は変らない」と記す一方で、「おなじい系列の南方的作品を、かういふ風に一冊にまとめ、かんがへてみると僕は今自分に大きな文学的な転期が来てゐるやうな気」^④もすると書いた。実際、『台湾小説集』を発行した直後に地平はマレーシアに徴用され、一年後に帰還、そして敗戦を迎えると、地平の「南方憧憬」並びに台湾に関わる「南方文学」にも終止符が打たれた。

しかし、唯一の例外は、神話を材とした作品である。地平は戦前、昭和九年に「人類創世」、昭和十四年「太陽の眼」と昭和十五年「太陽征伐」を発表した。戦後になってから単行本『太陽の眼』を出版した。この単行本には、戦前

に書いた台湾の神話に基づく物語数編が再び所収されており^⑤、地平の「『南方文学』への熱い思い」^⑥を証明している。また、地平は昭和二十九年に『日向民話集』を出版したが、これは神話文学の舞台を、台湾原住民から神話の里と言われる宮崎へ移したものと位置づけられる。

昭和十四年二月、『文学者』に発表された「太陽の眼」も、『蕃族調査報告書』中の数編の原住民神話に材を取り、一編の物語にまとめている。しかし、神話十話から成る作品「人類創世」や同十四話に基づく「太陽征伐」とは異なり、「太陽の眼」は、本論で述べるように、地平の創作部分が大きな割合を占めている。作品には作者の社会観が反映するため、「太陽の眼」もまた当時の時代背景を念頭に置いて検証する必要がある。特に「太陽の眼」は、文壇も帝国日本の「南進主義」に一色に染まった、緊張した時勢の中で生まれた作品である。そこで本発表の目的は、「太陽の眼」を対象としてその表現を分析することで、原住民神話作品における「南方憧憬」と当時の「帝国」から植民地を見る視点との接点を探究することにある。

—

地平の創作意識を検討するために、最初に地平の作品と原典との異同を比較することとする。「太陽の眼」のあらすじを原典と比較しながら、内容に基づいて整理すれば、以下の表ようになる。

(筆者作成)

	節 名	話 の 内 容
第1節	太古洪水の話	洪水で高山に避難した人々は蛙と鳥に救助されて火を取った。
*第2節	馘首の由来の話	犬と猿の首を刈って快感を知り、ついには悪い子供の首を刈った。
*第3節	創世の話	五男と一女が結び、またその女は六人の子供と結んで子孫を得た。

* 第4節	寡婦の不貞の話	カリカリという寡婦は子供を生んで社人に批判された。
第5節	ルグラヲ漂流の話	ルグラヲは陰部に歯があるため結婚できず母に海の中へ捨てられた。知本社に救助され、結婚を逃げて子供を産んだ。
* 第6節	兄弟帰郷の話	ルグラヲの子供二人は祖母に会いに行つたが失敗した。
第7節	大蛇退治の話	妹のラシラスは大蛇に吞まれ、兄弟は合力して大蛇を殺した。
第8節	敵から脱出する話	弟が敵に捕まえられたが、兄に救助されて脱出した。
第9節	父殺しの話	兄弟は恨みによって父を殺した。
第10節	兄弟昇天の話	兄弟が昇天して神になった。
* 第11節	太陽の眼の話	兄弟の甥は太陽の眼を排泄して吞む習慣があり、役人に連行され調べられるようになったところを逃げた。また妻に逃げられた

注1：節名は発表者による。

注2：表中の*印は、『蕃族調査報告書』に該当箇所のない節を指す。他方、*印のない節、すなわち第1・5・7・8・9・10節とほぼ同じ内容の話は『蕃族調査報告書』にも収録されている（資料一参照）。

「太陽の眼」は11節に区分できるが、このうち第1、5、7、8、9、10節は『蕃族調査報告書』（以下、原典）と話の内容が一致する話である（表参照）。これらの節は、あらずじから見れば、太古洪水の話（第1節）、ルグラヲ漂流の話（第5節）、兄弟の話（第7、8、9、10節）に分けられる。他方、原典に見当たらない節、つまり第2、3、4、6、11節の各節は、地平の創作である。地平の創作である節は、作品に奥行きをもたらす役割を担っていたため、原典にも収録されている節に比べて、細部に対する描写が多くなっている。

第2節と第3節は、第1節の続話である。第4節「寡婦の不貞の話」は、ルグララの母親の話であり、原典にほぼ同じ話が収録されているルグララ漂流の話（第5節）の前置きだと言える。第6節「兄弟帰郷の話」は、ルグララの子供がルグララの母親を訪ねる話の創作であり、第5節と第7節以降の兄弟の話（原典収録）とを接合する部分になっている。しかし、第11節「太陽の眼の話」は、これに関連する話が原典には見あたらず、前出の第2、3、4、6節とは異なり、地平が一から空想力を駆使して創作した話だと判断できる。このように最終節で太陽の目玉を飲む話が唐突に描かれるが、これも後述するように、地平が提唱した「南方的な文学」の要素、すなわち「行動的描写」、「感覚的な詩情」、「神話的空想力」、「熱情的な飛躍性」と決して無関係ではない。

次に、原典収録の話と内容が一致する節を詳しく見ると、それらの神話は原住民族の人々と生活の中に根付いていた動物・神との関係からなる話である。第1節「太古洪水の話」は、「蕃人ハ新高山ニ逃レタリ俄ノ事トテ火ヲ失ヒタレバ蛙ヲ遣ハシテ火ヲ探サシム彼首尾ヨク火ヲ得テ頭ニ戴キ泳ギ来リシガ新高山ノ麓ニテ水中ニ潜リシカバ折角ノ火モ消エ失セタリソレヨリ人々ハイシップ鳥ヲ遣ハセシニ彼何所ヨリカ火ヲ含ミ来リテ我等ニ与フ」と人が動物によって救助された話であり、5節「ルグララ漂流の話」は女が男によって救助された話、7節「大蛇退治の話」は妹の復讐をするため大蛇を殺して天罰を受けた話、10節「兄弟昇天の話」は、鳥の指示によって兄弟が昇天し雷の神になった話になっている。このように、それぞれの話において、人と動物、人と神とがすべて同じ地平に立っている。この特徴によって示された世界像は、一元的な原始世界である。

また、報告書の神話では、本能的な欲望と行動によって動く人間像が強調されている。冒頭の「太古洪水の話」で、蛙や鳥に火を取りにくるよう頼んだのは、人間の生きていく欲望に基づいている。この「生きる」こと同様に人間にとって本能的なことは、男女間の性的欲望であろう。一般的に、性的な要素は神話に不可欠な存在になっているが、原住民神話で格別に奇想天外なのは、

第5節「ルグラヲ漂流の話」である。原典では、ルグラヲは「白キ齒ノ玉門ニ生エアル」女となっており、「太陽の眼」では、「ルグラヲの（三字略）には恐ろしい齒が生えてゐる」となっている。

原典と対照すれば、この三文字の省略されたところは、身体の陰部を表した名詞だと分かる。以下のように多く略された部分も、性的な要素に関わる部分であろう。

竹をほどよく切つて、女の（十六字略）すると、不思議といふよりしかたがなかつた。竹片には齒でかんだ齒痕がついてゐるのである。つづいて犬を（十三字略）犬はたちまち頓死してしまつた。

砥石をもつてくると、彼等はルグラヲの（三字略）を磨り減らした。

この引用部分のように、地平は近代社会でタブー視される性的要素を隠さずに表現しようとしているが、検閲制度には通らず、伏字にさせられている。これは、同じく原住民神話を素材としつつも、暴力と性的な話が殆ど出てこず伏字箇所もない「人類創世」（昭和九年発表）との大きな相違である。

人間に害をなす動物を退治する話も、古来神話で見慣れている主題であるが、原住民神話では、兄弟が妹の復讐を図るために大蛇を退治しただけではなく、「父ノ妹ノ死シタルヲ知りナカラ探ス事ヲセサルヲ悪」く感じただけで、父殺しさえした。ここには、近代社会の道徳、善悪を考慮に入れず、単なる原始的な快楽・不快によって分節された世界像が表されている。

これまで見てきた要素をまとめれば、原住民神話世界が一つの原始的な世界像として鮮明に描写されていると言える。地平は原住民神話を素材とした「人類創世」の序文に、「若し小説の最高理念が人間の真の姿と心とを描くに在るものである、と仮定するならば、素朴、真卒なる古代の伝説・神話に僕達が多くの示教を得ること、蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあるに違ひない」^⑦と述べた。この言葉は、深い論理を持たず、空想的、身体的な「素朴、真卒」な原住

民神話世界をそのまま肯定することを意味している。地平は、本能的な快樂と不快に従って動く登場人物こそが「人間の眞の姿と心」をもつと認めているようである。このような態度は、地平が戦前に一貫して台湾原住民に多大な善意と好感を抱き、彼等を中心に多く作品を執筆していることを想起させる。

二

典拠とした原住民神話について、地平は「太陽征伐」の序文で以下のように記している。

その一部を摘記して、既に二三発表したことがあるが、幸ひに多少の好評を得た。次に掲ぐるものも、同じい報告より採つたものである。もとより創作ではない。かと言って、純正な伝説でもない。佐山、大西両氏^⑧があつめられたところのものに、いささか作者自身の空想を混へて編んだものである。今はただ原伝説の莫莫として悠久、古典的朗明なるに汚損するところなかつたやを恐れるのみである^⑨。

この引用から分かるように、地平は台湾原住民の口承神話を「莫莫として悠久、古典的朗明」と賛美し、原神話を「汚損」しなかったかと不安を感じつつも、神話の再生産によってその崇高性を表そうと試みた。昭和十二年十一月の随筆「民族的な神話」では、ドイツ浪漫派の「神話を文学における最高の形式とする考え方、及び文学が民族的な地方的な特色をもつべきであるという意見—その二つには強い共鳴を感じる」と述べ、「民族的な神話の創造、そこに僕は文学の最高理念を考える」^⑩と地平は強調した。

さらに、昭和十四年七月、ある随筆の中で「ある意味で凡ての文学者は、その文学活動の範囲に於いて、創作は勿論のこと、鑑賞の場でさえも、素材の制限を受けている」と指摘し、「素材的制約」^⑪を打破しようとする理念を述べた。このことから判断すれば、この随筆のやや前に発表した「太陽の眼」は、

素材的制約を打破せんとする、地平の実践だったのある。そして、昭和十五年九月に「南方的文学」という随筆の中で、以下のように南方文学の「美点」を力説したのも、この「南方憧憬」に由来している。

日本にはどういう理由で、南方的な文学がもつ多くの美点が生かされてこないのであろうか。南方に発生した文学には、世界的に、たとえば明るさであるとか、楽天性であるとか、行動的描写の卓越さとか、感覚的な詩情とか、神話的空想力とか、熱情的な飛躍性とか、——その他多くの特徴をもって居り、それらはまだまだ日本文学に新しい要素として生かし得るように僕には考えられるのである^⑩。

この引用文から、原住民神話が内包している「楽天性」や、「行動的描写」、「感覚的詩情」「神話的空想力」、「熱情的な飛躍性」などこそ、地平の提唱する南方文学の基本的要素であり、「南方憧憬」の内実でもありと考えられる。台湾原住民神話作品への地平の重視と自負が証言されていると同時に、台湾原住民神話を借りて、南方文学の基本的要素を生かした「南方文学」を樹立する意図が明瞭に表されている。

地平は、同じ随筆の中で、「現在日本に行われている文学の大部分は、東京的な、植地的な都会文学か、さもなくば北方的な、観念的な心理主義文学かである」、「日本文学の大部分がすべて安手の都会主義か、深刻癖のつよい心理主義ひといろに塗りつぶされている」と日本内地の文壇を批判し、「僕自身が考えている文学の指標であるが、それは、南方文学の樹立ということである」^⑪と、その決意を述べた。それは当時の「東京的な」文学に対抗するという性格を「南方文学」が帯びていることを明かにしたのである。従って、地平の「南方憧憬」から敷衍した「南方的文学」についての理念には、「南方的文学」の力を借りて、文学、文化のヘゲモニーを握っている、当時の文壇の「都会主義」、「心理主義」を一掃しようとする雄心が覗かれる。実際、地平の戦前文

学を全般的に見渡せば、地方よりも一層周縁化された「他者」、すなわち植民地を利用して、新しい文学を確立しようとする主題が一貫して存在するのである。

三

地平は、「南方文学」を樹立するように台湾原住民神話を取り上げる際、先述の通り、『蕃族調査報告書』を元にした。これは、日本が台湾統治初期の大正二年から大正十年にかけて、年に一部のペースで作成した調査報告書であり、台湾の「蕃族」(先住民族)を大きく八部族に分け、各部族を各社に細分して風俗や口承の伝説を記録している。しかし、この原住民の民俗学的人類学的調査に力を入れた結果として残された膨大な文献は、現在では貴重な資料であるとはいえ、当時の民俗調査政策は、勿論のこと当局の植民地統治にあたっての基本資料にするためであり、日本の植民地統治と密接に絡み合っていた⁴⁾。報告書は原住民を調査対象として、その人種的差異と文化的差異を取り上げて伝播させることによって、異文化の「他者」を確立させ、「文明開化」の正当化を結果的に図るものとなった。このことを、当時の中村地平は見すかすことができなかった。

地平は報告書の台湾原住民神話を改編して、原住民神話世界に存在する、「人間の真の姿と心」のありようを世に問おうと試みた。だが、この荒唐無稽な神話から原住民の「人間の真の姿と心」を見出すような読みを、当時の内地読者層に期待できるのであろうか。

第一章で示したあらすじからも見てとれるように、各節において暴力と直截的な性的記号とが反復して使用されているばかりか、たとえば乱倫、誅首、虐待、父殺し、排泄、生殖器官など、いずれも近代化された社会では忌むべき存在となっているものが、台湾原住民神話世界という隠れ蓑を使って、堂々と表現されている。当時の内地の読者層は、本能に従って行動すると読み取れる原住民を描いた作品を読んで、衝撃を受けたに違いないであろう。

首狩りの由来の一節では、「犬や猿の比ではない。これはいつそう愉快であった。生蕃が他社の隊を襲つて首狩などといふことを始めたのも、もとはといへばこの時の味が忘れられないからである」と、「生蕃」（開化されていない蕃族）の首狩りの風習が明らかに強調されている。原住民の「勇猛」さを連想させる話は少なくないが、「大蛇退治の話」では格別に細かいほど写實的に描かれている。「兄弟昇天の話」では、父殺しの場面があり、そこでは以下引用のように、生蕃の勇猛さと蕃刀を振り回して「出草」（首狩り）するイメージとが重ね合わされている。

急ぎ兄弟は叢のなかに隠れた。して父親が近よるのを窺つてゐた。わが子たちのたくらみを知る由もない父親は、鼻唄をうたひながら叢に近づいてきた。兄弟たちは躍りいで、刀をふるつて挑みかかつて行つた。（略）しかし弟のナヲナイは、背後から父親の頭めがけて、棍棒をうちおろしてしまつた。父はひと声叫んで叢のなかにうちたふれた。

その他、「日ごと蛇や毛虫を食べさせられるばかりか、屎尿までも飲ませられる」という残酷な私刑が施される描写もある。さらに、以上のような暴力的な筋は、奇想天外な「太陽の眼」を排泄してから呑む話（「太陽の眼の話」）と、ルグラヲの生殖器官に菌が生える話（「ルグラヲ漂流の話」）と併せて、原住民の表象は一層野蛮で野性的なものにされている。地平の意図にもかかわらず、むしろ内地読者層はこの作品を読む際、恐怖や驚異を感じ取ると同時に、現実の台湾原住民のイメージを、「帝国」がしばしば強調した「野蛮」、「非文明」、「未開化」のステレオタイプに結びつけたのではないだろうか。そうであれば、この作品は、霧社事件⁸を経た日本帝国にとって、植民地支配を正当化させ、原住民に対しての教育と文明開化の必要性を納得させるに好都合な文章になってしまうのである。

先述したように、文学的なヘゲモニーへの地平の抵抗は、「地方主義文学の

樹立」が出発点であった。この東京を中心としたヘゲモニーに対する自身の周縁という考えは、「帝国」からの視点の一環でもある。中央への抵抗の強さが、皮肉にも中央への志向の強さと同程度のもとなっている。したがって、周縁化されている地方作家として、地平はさらに一段と周縁化されている南方、植民地へと眼を向け、南方文学の樹立を図ろうとした。しかし、その副次的な結果として、台湾原住民の差異化された形象が際だつこととなり、地平は帝国との共犯関係におかれざるを得なくなったのである。

四

台湾原住民神話の世界像は、まさに原始的な本能しか持っていない、野蛮的な人物像で構成されるように描写されている。このような日本内地外のアジア植民地を舞台とする作品は、「帝国」と必然的に結びついてきた。しかし、それは作者の意図に反することだといえよう。なぜなら、原典に見当たらない、地平の創作部分を検討すると、作者によって人間の心理描写や細部の描写が加えられた結果、原住民神話の世界像は原典ほど単純なものではなくなり、人物像も原始性から一歩踏み出した点も見られるからである。例えば、原住民の風俗でもあった首狩りについて、以下のようにその由来が語られている。

当時はまだ穀類がなかつた。人人は大抵獸類を屠つて食料としてゐた。ある日、一人の壮丁は犬を食べよう、とて棒で打ち殺した。ふと彼は悪戯心を起した。犬の頭を棒の先きにつきさし、ふりまはした。山上の生活の無聊に苦しみぬいた人たちは、これに喝采をおくつた。「奇妙、奇妙」次いで猿を殺した時も、彼は又同じやうに首を竹竿の先きに刺しとほしてふりまはして見せた。人人はまた喝采を送つた。「しからば…」と、彼はとてつもないことを思ひつた。「人間の首ならばどうであらう」¹⁶⁾

このように、かくしゅ 首をめぐると原住民の心理が描写されることで、人間が動物の

首を刈ることは、食べるという自然な欲求を超えて、「悪戯」の考えも含むように書かれている。こののち物語では、本当に首を刈られた人間の話がでてくる。しかし、その対象とされたのは「社人にいつも害ばかり与へて、困らせてゐる」悪童だった。ここでは原住民の誡首の由来を、「懲悪」の考えがその原点の一つにあるとの解釈を示している。このような一種の「勧善懲悪」の観点は、原典には該当するエピソードのない、すなわち地平の創作の部分である他の節にも見られる。夫に先立たれた寡婦が、「侘び住ひに独身の寂しさをかこつてゐるが、いつのほどにかルグラヲといふ父無しの女兒を産んだ」という寡婦の不貞の話である。不貞が原因で社人に批判されて、以下のように社人の「嘲笑」、「迫害」まで受けることになる。

子供は輝くばかり美しく、可憐であつたが、世間態といふものもある。母親は子供を家のなかにひたかくしにかくし、自身も外出するのは極めてまれになつた。飲用水は幸ひ家のなかに井戸があるので、さして不自由もしない。しかし、家のなかに閉ぢこもつてゐるこの一寡婦は、間もなく社人疑惑の中心となつてしまつた。

ある日、カリカリの留守を見はからつて、数名の社人が俄に侵入した。社人は見なれない女の子が床の上に寝てゐるのを見つけてしまつた。憤り、社人は大切な井戸を凡て汲みほしてしまつた。

この話の中で、「社人」が世間体を代表して、放埒な欲望を持つ「個」に対する道徳的な制裁な力を施している。それにも関わらず、「あらゆる困難迫害にうち勝つて、一女ルグラヲを守りそだてる決意をかためた」と、作者は親子の愛情を強く描いている。この親子の間に有する自然な愛情は、作者によって繰返して強調されている。例えば、兄弟の「父殺しの話」には、作者は以下のように、原典にはない心理描写を付け加えている。

ある日であつた。父親であるシガシカラが銅の帽子をかぶり、いかにものどかさうに「タコバン」の前を通りすぎるのに二人は気がついた。兄弟は思つた。

「娘が大蛇に吞まれたのを知りながら、その大蛇を殺さうともしない。また自分たちがこのやうに苦勞して生きてゐるのに、探さうともしない。なんといふ冷酷な父であらう。父父無らずば、子も亦子ならず、だ。かういふ父を殺したとて、よもや天罰もくだるまい」

兄弟は自分の父殺しを合理化して、叢のなかで父親を待ち伏せた。しかし、「子として親を殺すやうな、不孝者がゐるか！」と父親に叱りつけられ、兄のアエボアンが「父の声にひるんでしまった。得たいの知れない怖れのために脚がどうしても一歩踏みこめないのである」と、親殺しの罪を犯す直前に躊躇を見せた。

しかし弟のナヲナイは、背後から父親の頭めがけて、棍棒をうちおろしてしまった。父はひと声叫んで叢のなかにうちたふれた。いちじの怒りから父親を殺したものの、兄弟はさすがに良心の苛責に耐へ得ない。

このように、父殺しの後での兄弟の懺悔の姿も描かれている。良心に苛まれる兄弟についての描写は、素朴な感情しか持てない口承神話の人物像には見当たらないため、作者の創作だと考えられる。

そのほか、「兄弟帰郷の話」では「子供たちは成長するとともに、母親の郷国を聞き知つた。子供たちは祖母を慕ひ、未見の地タンシンモクを訪ねたいと切願する」というように、生まれつきの祖母を慕う感情は「兄弟帰郷の話」の成立のきっかけになっている。この自然の感情から展開した話では、人物の心理描写がさらに多く表されている。次は兄弟が老婆、すなわち母親を海に流した祖母、カリカリと会った場面である。

なかには白髪のお婆が、ただ一人悄然と坐してゐた。胸あふれた気もちになり、兄弟は少時は言葉もなく、お婆の顔をうちまもつた。気のせいか、面影はどこやら母に通じてもゐるやうである。ややあつて長兄のアエボアンは口をきつた。

「わたしたちはルグラヲの子供です。母の云ひつけでここ迄参りました。わたしたちがお供します、お婆さんもわたしたちといつしょに知本社へおいでください。母もよろこぶでせうから」

そして、お婆は「感動」したにも関わらず、素直に信じることができずに兄弟を手荒く追い出す。だが、その後「ひよつとしたら……」「あれはほんたうの孫たちではなかつたかしら」と疑い、後悔し始める。

以上、作者によって細かく描かれた部分は、躊躇、懺悔、感動、後悔など、いずれも単純な快楽、不快よりも複雑な心理であり、親子の「愛情」を強調した描写である。このように、地平が登場人物の心理を付け加えた結果、地平の神話世界の間人像是単純な原始人とは言えなくなっているのである。

五

四章で見たように、想像力と描写力を運用し、作者は骨ばかりのような台湾原住民口承神話に肉付けさせ、豊富な文学的修飾を施した。上述したように人物に写実的な心理の描写を付け加えた一方で、以下に述べるように詩情あふれる描写も施している。先に登場した兄弟と祖母との間にある愛情、さらに兄弟の郷里への愛情を暗示するように、作者は次のように原住民部落の平和的で美しいイメージを仄めかしている。

翌朝未明に起きると、兄弟は勇躍タンシンモクをさして出発した。艱難辛苦いく日の旅、二人はやうやくタンシンモクに辿りつくことができた。部落は

平べつたい丘の上に在つて、丘のふもとは白い朝霧が動くともなく静かにながれてゐた。朝げの煙が霧よりかやや濃い色の縞目で、幾筋かまつすぐ天にのぼつてゐた。どこかでのどかな鶏の音がしてゐる。兄弟は部落を眺めわたした。部落も外れの狭い空地に、二本のビンロー樹が霧をつきぬけて空高く幽かに聳えたつてゐる。して、その下には小さな小舎がつくねんと建つてゐる。勇みたつて二人は丘にのぼり、その小さな小舎の表に佇んだ。

この工夫は、「感覚的な詩情」を表そうとするものであり、第11節「太陽の眼の話」における空想力と同様に、地平が提唱した「南方的文学」の要素と明らかに関連性をもっている。第11節「太陽の眼の話」で、地平は「厠にはひるたびに、糞便のなかから太陽の目玉をさがしだし、水洗ひしてはまた嘔みくたす習慣」がある男、カラベツを登場させた。確かに、食べ物を嘔下する感覚と排泄の感覚は、性の感覚と同様、原初的な快感であろう。太陽の眼を飲み下す感覚と、原典に見られた性の感覚とが共振した結果、身体感覚が全般的にこの神話の根底に流れることとなった。「太陽の眼」に関する話が少ないにもかかわらず、作品を「太陽の眼」と題するのは、作者が「神話的な空想力」と「熱情的な飛躍性」を発揮し、一つの南方的な、身体的な神話の世界を構築しようとしたことと決して無関係ではない。

以上のように、地平は原住民の単純な欲望と素朴な感情を認めて描き出す一方、逆に原住民の心理描写も思考力も描いている。作者の細部に加えられた表現によって、原住民の空想的な神話がやや現実性を帯びると同時に、一方では近代社会との距離が近くなり、登場人物の近代的な人間性に通じるような人間味も描かれていることは注目に値する。

むろん、以上のような詩情あふれる表現と登場人物の心理描写は、いずれも登場人物の行動を内地の読者が納得、理解できるように作者が工夫した結果だと考えられる。神話とはいえ、作者は、原住民の野蛮性と受けとられるような行為の描写にあたって、理由付けや彼らの心理描写を施している。それゆえ、

馘首という原住民の行為が「懲悪」の考えから出発したように書き、また兄弟の父殺しも仕方なくそういう結果になったと思わせるように理由付けたのである。こうした描写によって、地平は「帝国」内地の読者に対して、台湾原住民の野蛮な行為の合理的な理由付けを試みたのである。繰り返しになるが、地平は、好意を持って原住民の馘首、父殺しの行為を単なる残虐行為と判断されないような工夫をこらした。それにもかかわらず、「太陽の眼」は、作者の意図に反して、原住民のステレオタイプを再生産し、植民地言説を結果的に増幅させたのであった。

終わりに

地平が「南方憧憬」をもとに「南方文学」、「地方主義文学」を樹立するために書いた原住民神話作品は、図らずも「帝国」と結びついて原住民のステレオタイプを再生産し、「南方」の差別化につながったことが、分析によって見えた。調査書には、文明開化の正当性を図るために台湾原住民の「野蛮性」のステレオタイプを形づくっていく「帝国」の意図が存在した。これに対し、「太陽の眼」においては、地平の「南方憧憬」を出発点とし、原住民の崇高性を描こうとする意図が見られたが、結果において両者は協同することになっていた。その点では、確かに地平の観点には甘さがあった。しかしながら、逆説的であるものの、地平の戦前作品が上述のような矛盾に満ちたものとして現れたからこそ、台湾に関わる地平文学は今日でも植民地の諸問題を反映し、探究する価値があるものとなっている。

「太陽の眼」の翌年に発表した神話集「太陽征伐」は、地平の創作の部分がほとんど見当たらないほど原典に忠実に拠った作品である。この変化は、地平が宗主国の文学者として、植民地の原住民神話に手を加える際に必然的に付随する暴力性に気付いた結果であるかどうかは、さらに検討しなければならない。

【注】

- ①岡林氏は『「南方文学」その光と影』（2002年2月鈺脈社）及び「中村地平と佐藤春夫—南方憧憬の系譜—」等において、中村地平の文学作品がいかに佐藤春夫の浪漫性の系譜を繋げていることか、またその全般の文学像について周到な論を展開した。
- ②蜂矢宣朗「南方憧憬—佐藤春夫と中村地平—」1991年5月台北：鴻儒堂p135
- ③『台湾小説集』「人類創世」太陽征伐（序）pp78—79
- ④中村地平「後記」『台湾小説集』1941年9月、墨水書房p273（引用は復刻版、『日本植民地文学精選集〔台湾編〕』2000年9月、ゆまに書房）
- ⑤『太陽の眼』単行本で所収されているのは17話の神話である。「太陽の眼」と、「太陽征伐」から12話収録（「太陽征伐」、「蚩」二編除かれた）、「人類創世」から4話収録（天、蟬、蜂、地震）
- ⑥岡林稔「中村地平『台湾小説集』解説」『台湾小説集』pp4—5
- ⑦中村地平「人類創世」の序文から。『台湾小説集』p79
- ⑧「蕃族調査報告書」の編集者、佐山融吉、大西吉壽両氏のことを指す。
- ⑨中村地平「太陽征伐」の序文から。『台湾小説集』p160
- ⑩中村地平「民族的な神話」初出1937年11月初出誌不明。1939年9月、「民族的な神話」は「南方的文学」と共に「『文学の新しい方向』の一つとして」にまとめられ、『知性』に掲載された。引用は中村地平全集第三巻pp43—44。
- ⑪中村地平「情痴文学なるものに就て」初出1938年7月『中村地平全集第三巻』p81から引用
- ⑫中村地平「南方的文学」『知性』1939年9月。引用は『中村地平全集』第三巻pp47—48
- ⑬同注11
- ⑭人類学及び文献学とオリエンタリズムとの内部関連性は、すでに明らかにされたように、このような観察あるいは記録を通して、調査対象を特徴付け、図表化することは、一種の監視と管理の記号であり、統治行為の形式にはかならない。植民地言説の力の装置としての意味は、ホミ・K・バーバ「差異、差別、植民地主義の言説」『現代思想』（1992年10月pp61-79）を参照。
- ⑮1930年10月台湾霧社で起きた原住民蜂起事件である。
- ⑯『台湾小説集』「太陽の眼」p125

* 討議要旨

寺田澄江氏は、台湾語による台湾原住民神話のテキストはないのか、と尋ね、発表者は、口承によって伝えられてきたため、記録されたテキストは存在しない、日本語で書かれた蕃族調査報告書が最初の記録である、台湾では1980年代になってから見直され、中国語に翻訳出版された、と答えた。

李文茹氏は、「太陽の眼」の日本における受容はどのようであったか、と尋ね、発表者は、発表当時好評を得た、と答えた。

【資料一】「太陽の眼」と『蕃族調査報告書』との比較表

テキスト（旧漢字を新漢字に直した）

「太陽の眼」：『日本植民地文学精選集20〔台湾編8〕台湾小説集』ゆまに書房、平成十三年（初出：『文学者』、昭和十四年。引用は複製版による）。

『蕃族調査報告書』：臨時台湾旧慣調査会編、大正二年から大正十年。

節	頁	『太陽の眼』	巻頁	題名	話者	『蕃族調査報告書』
1	122	太古 イロツカアンに一匹の大蛇があらはれ、濁水溪のまんなかにとぐろを巻いてしまった。さしもに幅のひろい川の流も、ために堰きとめられてしまひ、水は辺りにあふれ、あふれた。樹木をへしをり、巨石をころがし、襲ひせまる激流に追まくられて、人人は高山をめがけて脱れ去る以外には術もなかつた。しかし、なにしろ思ひもかけない、俄かなことだ。人はめいめい思ふ方角に走り、新高山に逃亡したものや、卓社大山、東轡大山などに別れ登つたものもある。東轡大山には族長カルベスベス以外、五名の壮丁と、女・子供各一名づつとが集つた。	第六卷大正四年三月237	ハイシ ップ鳥 の話	武崙族 郡蕃バ ハフル 社 アン ク ケル ン	昔洪水ア 新高山ニ逃レタリ シ時蕃人ハ
2	123	高い——と曾つては思はれてみたのである。しかし今は脚下はるか黄濁の水の漫漫たるを眺め不思議と低い感じに変わつてしまつた——さういふ東轡大山の山頂に出遭つた彼等は、肩をだきあひ、背をなであひ、おたがひにその身の無事を喜びあつたものであつた。しかし、間もなく困つたことを彼らは発見しなければならなかつた。あまり慌てて避難してきたものだから、誰一人として、火種を持参する者がなかつたのである。不便この上もない。鳥獣の肉も生で食べるよりか仕方がないのである。しかし、既にいちど火食の味を知つてゐる彼らは、その美味忘じかたきものがあつた。日ごとに四方を眺めては、火の在りかを探さなければならなかつた。	同上 237	ハイシ ップ鳥 の話	同上	俄ノ事トテ火ヲ失ヒタ レバ蛙ヲ遣ハシテ 火ヲ探サシム
3	123	ある夜、新高山の暗い夜空にほのかな火影のたちのぼるのを彼らは発見した。彼らは雀躍した。カルベスベスは叫んだ。「たれか新高山に行つて、火を運んでくる者はあるのか」しかし、見おろせば真下はるか遠くには、水かさが増えるどころか、暗い闇のなかには黄濁した水がものすごい響とともに、相変らず洋々とながれ、淀んでゐるのである。遠く十数里離れた新高山の頂きに、人の心をそそりでもするものやうに、火影がただひと筋、空に幽かにのぼつてゐるばかりである。いかんともしがたい。誰も行かう、といひだす者はゐないのが当然である。しかし、その時であつた。暗がりのなかにだしぬけに声が				

		あつた。「わたしが行つて参りませう」見れば一匹の蛙である。一同は喜んだ。				
4	124	たちまち蛙は水のなかにとびこんだ。蛙は事なく新高山の頂きに泳ぎついた。しかし、間もなく蛙は肝心の火種も持たず、しょんぼりとカルベスベスのもとへ帰つてきた。蛙は泳ぐとき水底をもぐらなければならぬ。折角貰つた火種もたちまち水に消えてしまつたのである。カルベスベスは考へた。	同上 237	同上	同上	彼首尾ヨク火ヲ得テ頭ニ戴キ泳ギ来リシガ新高山ノ麓ニテ水中ニ潜リシカバ折角ノ火モ消エ失セタリソレヨリ
5	124	「空とぶ鳥ならば、必ずや目的をはたすにちがひない」カイビシ鳥を彼は呼んだ。翼をひろげ、羽ばたきするよ、と見る見るうちに鳥は石つぶでのやうな姿で、いつさんに新高山をめがけてとびさつた。間もなく鳥は口に火をふくみ、山に戻つた。				人々ハイシップ鳥ヲ遣ハセシニ彼何所ヨリカ火ヲ含ミ来リテ（我等ニ与フ我等今此鳥ヲ殺サザルハ其恩義ニヨル）
6	二 誠 首 の 由 来 の 話	125 当時まだ穀類がなかつた。人人は大抵獣類を屠つて食料としてみた。ある日、一人の杜丁は犬を食べよう、とて棒で打ち殺した。ふと彼は悪戯心を起した。犬の頭を棒の先きにつきさし、ふりまはした。山上の生活の無聊に苦しみぬいた人たちは、これに喝采をおくつた。「奇妙、奇妙」次いで猿を殺した時も、彼は又同じやうに首を竹竿の先きに刺しとほしてふりまはして見せた。人人は又喝采を送つた。 「しからは…」 と、彼はとてつもないことを思ひつた。 「人間の首ならばどうであらう」 ただ一人山に登り、仲間に入つた童子は、社人にいつも害ばかり与へて、困らせてゐる。杜丁は迷ひにその悪童を殺し首を竹竿につきさしてみた。犬や猿の比ではない。これはいつそう愉快であつた。生蕃が他社の隊を襲つて首狩などといふことを始めたのも、もとはといへばこの時の味が忘れられないからである。				(該当箇所なし)
7	三 創 世 の 話	126 さういふ風にせまい山の頂きで、一同は無聊に苦しんでゐたが、迷ひに一人の杜丁は女と窃かにマグハヒしてしまつた。思はず女が(十字略)いまましくてたまらないものだから一同は無理無体で女を共同の妻とした。かくて女は六名の子供を産んだ。しかし凡て男児ばかりであつた。そこでまた一女は六男に配して子供を産んだが、次の代からは一男一女の好合を得た。以来といふもの、互ひの子をめとりあつて夫妻としたので、暫くの間に、子孫は著しく繁殖した。				(該当箇所なし)
8		126 不自由な山の暮しを続けてゐるうち、歳月は雲と共に峰にきたり、峰を去り、いくとせ				(該当箇所なし)

			か過ぎた。 ある日であつた。濁水溪の河岸へ一匹の蟹が はひだしてきた。蟹は川底にとぐろを巻きつ づけてゐる大蛇の腹を、鉄で挟んだ。ひとた び、ふたび、さすがの大蛇も痛さに耐へか ね逃げださざるを得なかつた。さしも漫漫た る大水もみるみる退いてしまひ、水底からは 先づ丘の頂きが、次いでチャルチャル樹の 梢が、岩の頭が、ガツト草の穂が、次第にま ぶしい陽影の下に現はれ始めた。東巒大山の 一同は族長カルベスベスに引率されて山をく だり、なつかしいタンシンモクへと戻つた。恰 好の地に家をたて、新しい生活が始まつた。				
9	四 寡 婦 の 不 貞 の 話	127	幾代かのち、タンシンモクにカリカリとい ふ女がゐた。夫に早世せられ、侘び住ひに独 身の寂しさをかこつてゐたが、いつのほどに かルグララといふ父無しの女兒を産んだ。子 供は輝くばかり美しく、可憐であつたが、世 間態といふものもある。母親は子供を家のな かにひたかくしにかくし、自身も外出するの は極めてまれになつた。飲用水は幸ひ家のな かに井戸があるので、さして不自由もしない。 しかし、家のなかに閉ぢこもつてゐるこ の一寡婦は、間もなく社人疑惑の中心となつ てしまつた。ある日、カリカリの留守を見は からつて、数名の社人が俄に侵入した。社人 は見なれない女の子が床の上に寝てゐるの を見つけてしまつた。憤り、社人は大切な井戸 を凡て汲みほしてしまつた。間もなく家に戻 つたカリカリはこの始末に気がつくといふ時 は身を切られる思ひをしたが、かくてあるべ きではなかつた。心をとりなほし、あらゆる 困難迫害にうち勝つて、一女ルグララを守り そだてる決意をかためた。			(該当箇所なし)	
10	五 ル グ ラ ラ 漂 流 の 話	127	かくて、ルグララは社に比類のない、美し い娘と成長した。社に在る男といふ男は、老 若を問はず、この娘に思ひを寄せた。かつて その母親を嘲笑し迫害したことなどはいつの 間にか忘れはててゐた。間もなく母親カリカ リの眼がねにかなつた、そしてルグララ自身 の気にも入つた、最も遅い社丁が彼女の花 婿に選ばれることとなつた。しかし、奇怪な ことが起きた。社中の羨望のまこととなつたこ の花婿は、新婚の夜、たちまち頓死してしま つたのである。ルグララの(三字略)には恐 ろしい歯が生えてゐる、といふ噂がたちまち のうちに社中いつぱいにひろがつてしまつ た。	第 八 卷 大 正 二 年 三 月 67	二人ノ 兄弟雷 電トナ リシ話	阿眉族 馬蘭社 クモン、 バラツ、 サウマ、 ロベツ、 ウワイ	(前略) 夫婦トナリヌ 後間モナク一人ノ娘生 レタリ長シテ中々ノ美 人ナレハ婿トナラント 望ム者多クトクビシノ 門ハ為メニ市ヲナスニ 至レリ其中ヨリ娘ノ意 ニ適ヘル者ヲ迎ヘテ婿 トセシニ婿ハ一夜ニシテ 他界ノ客トナリヌ羨 メル者トモコハ幸ナリ 此時ニ申込マハ願望或 ハ遂ケント言ヒ寄ル者 甚タ多シ母ハ其中ヨリ 一人ヲ選ビテ婿トセシ ニ其婿モ亦一夜ニシテ 不帰ノ旅路ニ赴キヌ母 ハコハ不思議ナル事カ

						ナト思ヒツツモ三度目ノ婿ノ選択ニ氣ヲ揉ミ居タリ或日娘ノ昼寝シテ湯巻ノシドロニナリテ乱レ居ルヲ見テ直サントテ近寄シニ白キ齒ノ玉門ニ生エアルヲ見ルソレニテ以前ノ疑問モ晴レタレト
11	128	重ね重ねの不面目に、母親も今は捨て置きがたし、と観じた。意を決して、母親は朱塗りの箱をつくつた。箱には餅と、キドウンク及びピンローの実を入れた。母親は不意にルグララの体をいだき、その箱のなかにおしこめてしまった。娘は泣きさわいだが、用捨するところではない。上から固く箱に封をすると、社人を雇ひ、海岸にはこび、海中に投じてしまった。 箱は南海の潮路を漂ひ、浪のまにまに流れ、揺られて、遂には知本社の海岸に打ち寄せられた。	68	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社	斯ノ如キ娘ヲ持ツハ親ノ恥辱ナリトテ夫ノ許ヲ得テ朱塗ノ箱ヲ造リソレニ娘ヲ入レテ海ニ流シヌ箱ハ浪ニ漂ヒ 知本社ノ海岸ニ着ク時ニ
12	129	晴れた日であつた。空にはひとかけらの雲もなく、岸辺には陽炎がまぶしいばかりに燃えたつてゐた。丈より高いマングロープの蔭では、折りから知本社の若者たちが数名漁に熱中してゐたが、ふと、中の一人が浪にゆられてゐる朱塗りの箱を発見した。若者たちはいぶかり騒いだ。鎗の穂先にかけて、箱をひきあげようといふのである。	68	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社	知本社ノ社丁二人海岸ニ出テテ薪ヲ拾ヒ居シシカ綺麗ナル箱ノ渚ニ漂ヘルヲ見テ鎗ニテ引キ上ケタリ二人箱ヲ開ケントセシ時 カタグリヤンバクリヤンノ両名銃弾ノ掃リ海岸ヲ通ルヤ渚ニ漂ヘル箱ヲ見タレバ何物ナラント携ヘタル槍ニテ引キ揚ゲタルニ
			第五卷大正九年十二月275	カタグリヤンバクリヤンノ話	排湾族カテボル社ゴサイバンシン	
13	129	箱のなかから、哀れな女の声があつた。「ふびんと思召し、どうぞこのまま海のなかに流して置いてくださいませ」女の声であるからには、いよいよもつて捨て置くわけにはゆかない。箱はたぐりよせられた。蓋があけられた。いやがる娘がひきだされた。社丁のなかにイライといふ物好きな男があつた。イライは竹をほどよく切つて、女の（十六字略）すると、不思議といふよりしかたがなかつた。竹片には歯でかんだ歯痕がついてゐるの	68	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社クモン、バラツ、サウマ、ロベツ、ウワイ	中ヨリ女ノ声ニテ此箱ヲ開ケ給フナヨ妾ハ母ノ憎悪ヲ得テ海ニ流サレタルモノナレハ此箱ノ中ニテ死スルコソ本望ナレトイフ然レトモ男等ハ之レヲ許サス（略）如何ニ白キ齒數本生エ居タリ其時一人ノ老蕃賢クモ砥石ヲ持

		である。つづいて犬を（十三字略）犬はたちまち頓死してしまつた。				チ来ラセ杜丁ニ命シテ其齒ヲ磨リ減ラサヒ自ラ茅ヲ取り来リテ其心ヲ玉門ニ入レ見シニ咬ミツキシ跡ノ見ユレハトテ
	275	カタグ リヤン バク リヤン ノ話	排湾族 カテボ ル社 ゴサイ バンシ ン			中ヨリ憎カラヌ一人ノ美女現ハレタリ其儘助ケヤルモ物足ラズ思ヒタレバ二人ニテ無理無体ニ彼ノ腰布ヲ捲リタリ然ルニ白キ齒ノ陰門モアルヲ見タレバ先ヅ供ヒタル犬モテ試ミシニ其陰茎ヲ忽チ截リ取ラレタリ斯クテハト
14	129	「なるほどこれは顔に似合はぬ太い代物だ」杜丁たちは騒いだ。しかし、打ちすて置くにはルグララは余りに美しすぎる。砥石をもつてくると、彼等はルグララの（三字略）を磨り減らした。	68	二人ノ 兄弟雷 電トナ リシ話	阿眉族 馬蘭社	再ヒ命シテ磨リ減ラサシム暫クシテ再ヒ「アバット」ヲ入レテ試サセシニ今度ハ傷モツカサレハ一人ノ蕃丁マリルクト云フ者ニ命シテ執行セシム今ハ常人ト変リタル事モナキ様子ナレハトテ
				カタグ リヤン バク リヤン ノ話	排湾族 カテボ ル社 ゴサイ バンシ ン	兩人砥石ニテ其齒ヲ磨リ減ラシ再ビ他ノ犬ヲ以テ試ミシニコノ度ハ咬ミツキタル跡モナシ依リ
15	130	彼等は頭目シガシカラのもとにルグララを連れてゆき、見せた。ルグララは十分シガシカラの気に入つた。二人は夫婦になつた。今は事なく夫婦のちぎりが結ばれた。夫婦の間には間もなくアエボアン（男）、ナヲナイ（男）、ラシラス（女）、カラル（盲女）の二男二女が相次いで産れた。	69	二人ノ 兄弟雷 電トナ リシ話	阿眉族 馬蘭社	クミチキットト云ヘル頭目娶リテ自ラノ妻トナシヌ 其後久シラスシア三人ノ子ヲ産ミタリ各々ノ名今ハ忘レタリトモソノ長男ノ子ニサロガント云ウ者アリキ或日ブノト云フ所ニ遊ヒニ赴キシカ其所ニカリテントト云フ娘アリヲ娶リテ妻トナシ三人ノ子ヲ産ミタリ長男ヲカフラサン次男ヲカラバヤイ三番目ハ女子ニシテモダルト云フ
	275	カタグ リヤン バク	排湾族 カテボ ル社			其女ヲ頭目ニ渡シタリ斯クテシハシハウハ彼ニヨリバサカラ ルア

				リヤン ノ話	ゴサイ バンシ ン	サヤウ ラリヘンサノ 三子ヲ産ミタリ三人首 尾ヨク成長シテ
16	六 兄 弟 掃 郷 の 話	130	子供たちは成長するとともに、母親の郷国を聞き知った。子供たちは祖母を慕ひ、未見の地タンシンモクを訪ねたいと切願する。遂ひには母親も許さざるを得なかつた。			(該当箇所なし)
17		130	「それぢや、アエボアンとナラナイとの二人で行つておいで……。祖母さんの家には庭に二本の大きなビンロー樹が植つてゐる、それを目印にしてさがすんだよ。そしてうまくさがしあてることができたら、その証拠にビンローの実と、祖母さんが大切にしまつてゐる大きな木の匙とを貰つておいで……」			(該当箇所なし)
18		130	翌朝未明に起きると、兄弟は勇躍タンシンモクをさして出発した。艱難辛苦いく日の旅、二人はやうやくタンシンモクに辿りつくことができた。部落は平べつたい丘の上に在つて、丘のふもとには白い朝霧が動くともなく静かにながれてゐた。朝げの煙が霧よりかやや濃い色の縞目で、幾筋かまつすぐ天にのぼつてゐた。どこかでどのかな鶏の音がしてゐる。兄弟は部落を眺めわたした。部落も外れの狭い空地に、二本のビンロー樹が霧をつきぬけて空高く幽かに聳えたつてゐる。して、その下には小さな小舎がつくねんと建つてゐる。勇みたつて二人は丘にのぼり、その小さな小舎の表に佇んだ。			(該当箇所なし)
19		131	なかには白髪の老婆が、ただ一人悄然と坐してゐた。胸あふれた気もちになり、兄弟は少時は言葉もなく、老婆の顔をうちまもつた。気のせみか、面影はどこやら母に通じてもゐるやうである。ややあつて長兄のアエボアンは口をきつた。「わたしたちはルグララの子供です。母の云ひつけでここ迄参りました。わたしたちがお供します、お婆さんもわたしたちといつしょに知本社へおいでください。母もよろこぶでせうから」			(該当箇所なし)
20		131	老婆は忘れてゐた昔のことを一瞬のうちに想ひだした。老婆は感動的になつた。しかし、あの海にながした娘が、今尚生きてゐよう、とは信じることもできない。荒々しく答へた。「いいや、わしの娘はもう疾うに死んでゐる筈ぢや。お前がたは孫などと云つて、この一人住ひのわしを騙しにきたのにちがひない」			(該当箇所なし)

21	132	あまつさへ、老婆は兄弟を手荒く戸外に追ひださう、とさへする。兄弟は心外であつた。親近な思ひが、思ひもかけない冷酷な言葉や、動作で報いられることを知ると、絶望せずには居られない。今はこれまでであつた。弟のナヲナイは台所へ侵入すると、老婆の制止を聞くどころではなかつた。大きな木匙をさがしだすと、懐に入れて表にとびだした。この間、兄のエアボアンは庭前のピンロー樹に滑るやうによちのぼり、果実をひとつもぎとつてしまつた。				(該当箇所なし)	
22	132	老婆は表に出ると、逃亡してゆく二人の後ろ姿に、ありとある罵りと呪ひとの言葉を投げかけた。投げてるうちに、しかし、ふつと気が変わった。 「ひよつとしたら……」 間もなく、老婆は力なくうなだれてしまつた。 「あれはほんたうの孫たちではなかつたかしら」				(該当箇所なし)	
23	133	兄弟は家に帰ると、匙とピンローの実とを母親のルグララに手わたした。ルグララはよろこんだ。 しかし、間もなくルグララは風土の病気が原因で死んでしまつた。エアボアン兄弟は、母の死を報せるために再びタンシンモクに赴いた。けれど、その時既に祖母の姿は丘の上に見ることはできなかつた。社人の誰彼に訊ねると、答へるやう、いつか二人の若者が匙とピンローの実を盗んで逃げ去つたことがある。以来といふもの老婆は独り思ひ悩んでゐる風情であつたが、間もなく病みついて、死んでしまつた、と。兄弟は落胆した。悄然と知本社に帰る以外には術もなかつた。				(該当箇所なし)	
24	七 大 蛇 退 治 の 話	133	ある朝あけ早くであつた。妹のラシラスは家近い小川に赴いて、洗濯してみた。水の面には白雲の影が映り、岸辺の葎の間からは白サギの群がとびたつてゐた。白サギが体を大きな翅でゆるやかに叩きながら、蒼空のなかにとびたつてゆくのをラシラスは眺めるともなく見送つてゐた。間もなくであつた。傍らの鬼茅の間から一匹の蛇がぬつと現れた。大蛇は滑るやうにラシラスの傍らに近づいて行つた。あつと声をたてる暇もなかつた。大蛇は忽ちのうちに娘の体をひとつ呑みに呑みこんでしまつた。	69	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社	一日兄弟二人妹ニ命シテ洗濯セシム妹ハミサラワフガイト云フ所ニ洗濯ニ行キシカ
			275	カタグリヤンバクグリヤンノ話	排湾族カテポル社ゴサイバンシン	妹ノラリヘンハ早ヤ河ニ赴キテ兄弟ノ衣ヲ洗濯スル程トナリス然ルニ偶々彼ノ河ニテ洗濯スル折ニ何処ヨリカ大蛇現ハレ来リテ彼ヲ呑ミタリ	
25	134	昼食時になつても妹は帰つて来ない。不安に駆られたエアボアン兄弟は、連れだつて川岸へと赴いてみた。妹の姿はない。ふと見る	275	二人ノ兄弟雷電トナ	阿眉族馬蘭社クモン、	昼過クルモ帰ラサレハ兄弟心配ノ余リミサラワガイニ行キテ見シニ	

		と、叢のなかに大蛇の匍つた跡だけが、草の穂をなぎたふして一条の通路を示してゐる。急ぎ兄弟はその跡をつけて行つた。通路はムラナヲナンまでつづいてゐた。しかし、それが終つたところに、兄弟は大きな洞穴の在るのを発見した。	リシ話	パラツ、サウマ、ロベツ、ウワイ	洗濯セシ衣類ハ石ノ上ニ乗セアリシモ妹ノ姿ハ見エス小用ニ行キシカト叫ヘト答ナシ叢ヲ見レハ怪シク隧道ノ如ク草ノ倒レ居リヲ見タリコレ必然大蛇ノ為メニ呑マレタルナラントテ二人ハ驚キツツモ其跡ヲ探シ行キ遂ニカウサント云フ山ニ達シヌ山腹ニ一ノ穴アリ兄弟ハ其穴ヲ見定メ妹ノ讐己レ殺サスニ置クヘキカト	
			275	カタグリヤン バク リヤン ノ話	排湾族 カテボル社 ゴサイ バンシン	家ニアリシ兄弟等ハ何時マデモ妹ノ掃ラザルニ氣ツキ共ニ出デテ其跡ヲ探シタリサレド妹ノ姿ハ見エズ唯衣類ノ石上ニ残サレアルノミソレヨリ其アタリヲ探セシニ大ナル穴アリ或ハ蛇ニテモ来リテ呑ミシニアラズヤト
26	134	兄弟はたちまち家へ帰ると、刀を砥いだ。ひとたび、ふたたび、みたび——砥いた刀は迷ひには石を断ちきることができるやうになつた。兄弟は勇みに勇んでムラナヲナンに辿りつき、かの洞穴の表にたつた。先づ棒で穴をつつた。大蛇は怒つて眼を輝やかし、腹まで裂けるかと思はれるほどの大口をひらいて、表に滑べりでた。人間の背丈よりも高く、大蛇は首をもたげて、兄弟にとびかかつてきた。兄弟は物ともせず、研ぎすました刀をふりあげ、大蛇の頭をめぐけて切りつけた。口から腹、腹から尾、二人は大蛇の体をずたずたに切り裂いた。間もなく刀の刃はなにか固いものに触れ、音がした。とりだしてみると、それは妹ヲシラスがつけてゐた腕輪であつた。	69	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族 馬蘭社 クモン、 パラツ、 サウマ、 ロベツ、 ウワイ	急キ家ニ帰り刀ヲ研キレナラハ如何ナル大蛇モ斬ルヘシト先ツ試ニ石ヲ切り試ミシニ三度目ニハ石ハ鈍クモ碎ケタリ兄弟勇ミテ山ニ進ミ行キ兄ハ先ツ棒ニテ穴ヲ衝キシニ蛇ノ内ヨリ二人ヲ瞰ミ焰ノ如キ舌ヲ出シテ飛ビカカル弟ハ刀ヲ振り上ケテ力任セニ切キ下セシカ傷ツカス兄ハ弟ヨリ刀ヲ取ル暇モナク携ヘタル棒ニテ開ケル口ニ飛込ミス蛇ハ大ニ弱リテ唸リツツ穴ニ入ラントス兄ハ再ヒ刀ヲ取ル直シレ妹ノ讐思ヒ知レヨト横腹ヲ力任ニ衝キケレハ蛇モ今ハ堪ヘカネテ細長ク唸リツツ口ヲ閉ジテ横ハル兄ハスカサス妹ノ仇ヲ報イント千々ニ碎キテ腹部ニ至レハカチント音スナリ不思議ヨトヨク見

						レハ妹ノ帯ヒシ腕輪ナリ
			276	カタグ リヤン バク リヤン ノ話	排湾族 カテボ ル社 ゴサイ バンシ ン	槍ニテ其穴ヲ探リシニ 中ヨリ大蛇現ハレタリ 其ヲ見テ兄ハ驚キ且ツ 怖レ後ヲ向キテ逃ゲ去 レリ後ニ控ヘタル弟ノ ルアサヤウハ逃スモノ カハト携エタル槍ヲ振 ヒテ大蛇ヲ衝キテ斃シ 次テ刀ヲ以テ其腹ヲ裂 キタルニ妹ノ帯ビタル 腕環ヲ得タリ
27	135	しかし、不思議といふよりか術もなかつた。大蛇の命が絶えたとたん、あたり一帯は草といはず木といはず、生ある者はことごとく、みるみるうちに枯れしぼんでしまった。これでは食物を得ることも絶望である。しかも、不幸なことに兄弟は蛇を殺した際の厭勝を知らなかつた。そのまま家に帰ることもできないのである。やむなく兄弟は思ひきつてアミ族の甘蔗畑にゆき、その茎を盗んで食べた。始めアミ族の社中では、その音を聞いた時、「山猫だらうか」などと、噂しあつたものであつた。しかし、その音は三晩もつづいた。四日目の夜であつた。	70	二人ノ 兄弟雷 電トナ リシ話	阿眉族 馬蘭社 クモン、 バラツ、 サウマ、 ロベツ、 ウワイ	妹ノ形見ト腕輪ヲ取り 上ケテ袋ニ納メ尚ホモ 引続キ蛇ヲ切ル然ルニ 見ル間ニ傍ノ草木ハ皆 枯レ果テタリ兄弟思ヘ ラクスクノ如ク草木ノ 枯レタリルハ必然蛇ヲ 殺セシ天罰ナラン今ハ 蕃社ニ帰ル事能ハスト テ二人ハ山ニ入り草根 ヲ噛ミテ生活シヌ然ル ニ山上ニ一ノ蕃社アリ 畑ニハ甘蔗多ク植エツ ケアルヲ見テソヲ盗ミ 取ラント夜ニ乗シテ甘 蔗ヲリ取ラントセ シニキューグユート音 ス蕃社ノ内ニハ其音ヲ 聞キ何時カ獵ヲ追ハサ ルヘカラスナト独言セ シ者撻撻リシカ翌日又 キューグユート音シ其音 ノ如何ニモ盜賊ラシケ レハ
			276	カタグ リヤン バク リヤン ノ話	排湾族 カテボ ル社 ゴサイ バンシ ン	両名ハ其ヨリ狂気トナ リテ窃盜ヲノミ事トス ルニ至レリ而して彼等 兩人ハ或日卑南社ニ赴 キテ甘蔗ヲ盗ミシニ卑 南社人ハ始メノ中ハ山 猫ノ所為ナラントオモ ヒシモ夜中キュー グユート音ノスルヲ聞 キツケテ必定盜人ノ仕 業ナラメト
28	135	社人たちは畑いちめんに灰をふりまいて置いた。翌朝検べてみると、灰の上には人間の	70	二人ノ 兄弟雷	阿眉族 馬蘭社	蕃社ノ杜丁共灰ヲ播キ 散シ置ク二人ノ兄弟ハ

	八敵から脱出する話		足跡が歴歴と印されてある。その夕べ、社の社丁たちは盗人が来たら搦めとつてやらうと、刀槍を用意し、いきまいてみた。そのことを兄弟は知る由もない。またもやその夜も闇に乗じて、畑に行つた。一人の社丁忽ちこれを見つけた。あわただしく竹鼓が鳴らされた。警戒の社人たちが幾人も躍り出で、兄弟をとりかこんだ。	電トナリシ話		ソヲ夢ニモ知ラス再ヒ行キテ甘蔗ヲ盗ム翌朝蕃社ノ者ハ明ニ灰ニ印セル足跡ヲ認メ其夜ハ一同見張りテ盜賊ヲ捕ヘント敷園クトモ知ラス二人ハ前夜ノ如ク忍ヒテ畑ニ至ル社丁等ハ竹鼓ヲ鳴シテ合図ヲナシ四方ヨリ取り巻キテ	
		277	カタグ リヤン バク リヤン ノ話	排湾族	灰ヲ撒キテ警戒セリソヲ知ラザル兩名ハ前夜ノ如ク共ニ行キテ足跡ヲ灰ニ印シタレバ		
29	136		しかし、兄のエアポアンは速早くかこみをやぶつて、闇のなかにまぎれ、逃げた。弟のナヲナイだけがとり圧へられた。縲紲の苦をなめる身とはなつたのである。日ごと蛇や毛虫を食べさせられるばかりか、屎尿までも飲ませられる。日に日に見る影もなく、憔悴してゆくばかりであつた。	70	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社	遂ニ弟ヲ捕ヘ直ニ牢ニ入レテ閉込メ日々与フル食ハ虫及豚糞人糞等ニテ到底口ニスルコト能ハサレハ見ル影モナク瘦セ衰ヘテ死ニ瀕セリ
		277	カタグ リヤン バク リヤン ノ話	排湾族カテポ ル社 ゴサイ バンシ ン	遂ニ弟ハ捕ヘラレタリソレヨリ日々与ヘラルル食物ハ虫糞等ニシテ食スルコト能ハザルモノノミナレバ弟ハ見ル見ル瘦セ衰ヘテ將ニ死セントスル有様ナリキ		
30	136		ある日、アミ族社の空高く、聞きなれない念り声を発してとんでくるものがあつた。社人たちが、驚きあふいでみると、虫にしては大きすぎる、鳥にしては奇妙な形をもつた一怪物がいうと旋回してゐる。人々が罵りさわぐのを聞きつけると、捕はれの身ながら、ナヲナイは必死に嘆願した。「俺に見せてくれ！俺はその怪物を知つてゐるやうな気がする。ちよつとの間でいいのだ。表にだしてくれ！」今は社人たちも承知した。	70	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社	時ニ兄ハ弟ノ身ノ上ヲ心配シテ竹ノ皮ニテ風ヲ造リ其尾ニ刀ヲツケ草ノ纖維ヲ燃リテ絲ヲ造リ風ノ有ル日ニ揚ク山上ノ蕃社ノ人々ハ未タ風ヲ知ラス怪シキ物ノ飛ヒ来ルトテ皆々出テテ見物シ其噂モトリトリナリ弟はコレヲ聞キテ如何ナルカ我カ見テ分ル事モアラン暫時ニテヨロシケレハ牢屋ヲ出サレヨト熱心ニ乞ヒケレハ社人モ許シテケリ
		277	カタグ リヤン バク リヤン	排湾族カテポ ル社	折リカラ天空ニ風ノ飛ビ来リテ唸ルアリ社人ハ未ダ其ヲ知ラザレバ何物ナラント噂モトリ		

					ノ話		ドリナリケレバ弟ハ其ヲ聞キ我ニ見シメヨト乞ヒテ外ニ出デタリ
33	137	表にでてまぶしく輝きわたつた大空を眺めあふいでみると、それは松の木でつくつた大風であつた。兄のエアボアンがブラブラックから揚げてゐるのにちがひなかつた。胸とどろかし、うち眺めてみると、間もなく風は次第に地上近く降りてくる。手が届く位まちかに追つてきた。ナヲナイはすばしこく尾をつかんだ。ふたたび風はみるみる地上高く離れてゆく。雲近く天翔ける。	70	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社	弟ハ頻リニ風ヲ見居リシカ風カ次第ニ降りテ手ノ届ク所ニ来リタレハ飛ヒ跳ネテ其尾ヲ掴ミ共ニ天ニ昇リ行キタリ	
			277	カタグ リヤン バク リヤン ノ話	排湾族カテポル社	風ハ次第ニ低クナリタレバ弟ハ手ヲ延バシテ其尾ニ結ビツケラレタル鈴ヲ取りテ撒キ散セシニ社人ハ喜ビテ其ヲ拾ヒタリ斯クテ三度目ニシャ社人ノ鈴ヲ拾ヘル間ニ弟ハ風ト共ニ天ニ昇リ	
	137	風の一つの尾にはひとつりの刀が結んであつた。ナヲナイはその尾を切つた。刀はものすごい勢ひで地上に落下した。遙か低い地上の畑では一人の妊婦が綿を採取してゐた。刀は妊婦に当つた。悲惨な最後を逃げた女をとりかこんで、罵り騒いでゐるアミ族の社人たちの姿が小さくはるか後方にとり残されてゆく。ブラブラックの上空に来た時であつた。風の糸は手繰られた。事なくナヲナイは兄のエアボアンに再会することができた。エアボアンは弟をルデアンに伴つた。糞物を吐かせ、新に食物を与へて助つた。間もなくナヲナイの体は完全に恢復することができた。	70	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社	其時尾ニ繫キ有リシ刀ハ地上ニ落ち庭ニ綿ヲ採リ居シ孕女ノ腹ニ刺リテ其女ハ死セリ弟は首尾ヨク兄ニ遇フ事ヲ得テ再会ヲ喜ビ	
			277	カタグ リヤン バク リヤン ノ話	排湾族カテポル社ゴサイバンシン	中途ニテ風ニ結ビツケラレタル刀ヲ取りテ地上ニ落セシニ其刀ハ一人ノ妊婦ノ腹ヲ破リテ胎児ハ外ニ飛ビ出デタリ斯クテ弟ハ兄ト再会シテ腹中ヨリ汚物ヲ吐キ出シ共ニ他ニ赴キテ暮サントセシガ	
34	九父殺しの話	137	兄弟たちは蛇を殺した時の厭勝を知りたい、と思つた。社中の人人に訊ねまはつたが、誰一人知つてゐる者もゐない。やむかたなく二人は「タコバン」を拵へ、そのなかに住つた。ある日であつた。父親であるシガシカラが銅の帽子をかぶり、いかにものどかさうに「タコバン」の前を通りすぎるのに二人は気がついた。兄弟は思つた。「娘が大蛇に呑まれたのを知りながら、その大蛇を殺さうともしない。また自分たちがこのやうに苦勞して生きてゐるのに、探さうともしない。なんといふ冷酷な父であらう。父父無らば、子も亦子ならず、だ。かういふ父を殺したとて、よもや天罰もくだるまい」	70	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社	相共ニ木ヲ切り枝ヲ集メテ小屋ヲ建テテ暮シス母ハ兄弟ノ帰ヲ探シ案シテ日々山ヲ探シ歩キシカ兄弟ノ恙ナク小屋ニアルヲ知り喜ヒテ家ニ帰り父ニ告ク父ハ兄弟ヲ伴ヒ帰ラントテ山ニ赴ク然ルニ兄弟等ハ父ノ妹ノ死シタルヲ知りナカラ探ス事ヲセサルヲ悪ミシ
34	138	急ぎ兄弟は叢のなかに隠れた。して父親が	70	二人ノ	阿眉族	父ノ至レルヲ見テ兄ハ	

		<p>近よるのを窺つてゐた。わが子たちのたくらみを知る由もない父親は、鼻唄をうたひながら叢に近づいてきた。兄弟たちは躍りいで、刀をふるつて挑みかかつて行つた。父親は驚き、慌てて叱りつけた。</p> <p>「子として親を殺すやうな、不孝者がゐるか！」</p>	71	兄弟雷電トナリシ話	馬蘭社	刀ヲ振りテ殺シ弟ハ首ヲ取りタリサレトモ父ヲ殺シタル事ナレハ厭勝セザレハ天罰ヲ蒙ル事疑ナ
35	138	<p>さすがに兄のエアポアンは父の声にひるんでしまった。得たいの知れない怖れのために脚がどうしても一歩踏みこめないのである。しかし弟のナラナイは、背後から父親の頭めがけて、棍棒をうちおろしてしまった。父はひと声叫んで叢のなかにうちたふれた。いちじの怒りから父親を殺したものの、兄弟はさすがに良心の苛責に耐へ得ない。あまつさへ蛇を殺した時の厭勝さへも知ることができないから、今は社に帰る、といふわけにもゆかない。</p>				(該当箇所なし)
36	十兄弟昇天の話	139	<p>どうしたものか、と二人は思案にうちくれた。その時であつた。遠い山の端に百舌鳥の啼く声が聞えた。しかしあまり遠くて、その声では吉凶の判断がつかかねる。躊躇してゐると、続いて頭上をクツクイ鳥が啼きながら飛び交うた。「タツチユカ、タツチユカ、ササタツチユカ」占つてみると、答へがでた。「天にのぼるがいい！」否応を云つてゐる場合ではなかつた。兄弟はうちそろつて昇天せねばならなかつた。</p>	二人ノ兄弟雷電トナリシ話	阿眉族馬蘭社クモン、バラツ、サウマ、ロベツ、ウワイ	兄弟ハ致シ方ナク山ニ帰リタルカ後遂ニ兄ハ雷トナリ弟ハ稲妻トナリシトツ
37	139	<p>間もないことである。その付近一帯の地には頻頻として地震が起り、また、雷が鳴つた。被害は甚大で、なかには家族全部が地震のために石に化した家さへも出る始末である。余談めくが、この一家は曾つてこの兄弟をひどく苦しめたことがあるので、かういふ惨事をひき起こさねばならない結果になつたのである。そしてこの石と化した人間の像は今尚現存してゐる、といふことである。更に、現在にいたるまで、この付近の社丁たちが戦争や、誠に起草する際は厭勝人が、「地震るへよ、雷なれよ」と、祈る習慣である。して、地震がゆれ、雷が鳴る時は、戦ひに必ず勝つと社人たちは信じこんでゐる。それは兄のエアポアンは雷に、弟のナラナイは地震になつたものであると、彼等は考へてゐるからである。</p>				(該当箇所なし)
38	十一太陽の	140	<p>さて、一方兄や姉たちに別れ、ただ一人生き残つてゐた盲女カラルは、社内に住む一人の社丁に嫁した。夫はやさしい性質で盲女の妻を常日頃勞つてやつた。カラルは嘆くのが常であつた。「どうぞして、ただのひと眼で</p>			(該当箇所なし)

眼 の 話	いい。あなたのお顔が拝みたいわ」二人の間にはカラベツといふ子供が産れた。				
39	140 カラベツは長じたのち、ある日パパヤといふ土地に行つたが、そこで太陽の油断を見すまし、その目玉を盗んで食べてしまつた。その後カラベツは厠にはひるたびに、糞便のなかからその目玉をさがしだし、水洗ひしてはまた眺みくだす習慣であつた。それは支那人の役人の耳にまで入つた。役人は考へた。「それは奇怪な話ちや、本人を招いて、ことの真相を問ひたださねばなるまい」カラベツに呼びだしが届いた。しかし、カラベツは出むかうともしない。遂ひに縛り捕らう、といふことになり、数名の支那人が密かに彼の家に赴いた。しかし、その時既にカラベツは急ぎ逃れ水をわたつてクラルツに辿りついてゐた。				(該当箇所なし)
40	141 クラルツでカラベツはラボツトといふ女と夫婦になつた。ある日カラベツが髪を洗はうとすると、傍らから妻が云つた。「その間、わたしに髪飾りをお貸しなさい。水に落ちると、いけないわ」妻は髪飾りを受けると、夫の油断を見すまし、そのままどこかに姿を消してしまつた。して、遂ひ家には帰つて来なかつた。やむかたなく、カラベツは知本社に独り戻つた。その後役人からは再び呼びだしはかかつてこなかつた。時が経つに従ひ、知本社もいつの間にか人が繁殖し、遂ひには現在のやうに大社になつてしまつた。				(該当箇所なし)